

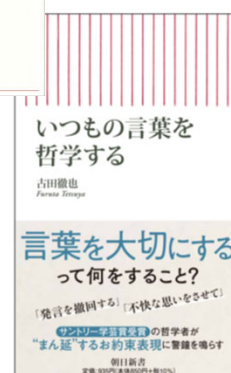
日本語の 「やさしさ」と「豊かさ」 の緊張関係について

古田 徹也

(東京大学人文社会系研究科)

自己紹介

- 現代哲学・現代倫理学の研究者
- 「言語」「心」「行為」が主たる関心
- ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン (1889-1951) の研究が中心軸
- 『言葉の魂の哲学』 (講談社選書メチエ)
『いつもの言葉を哲学する』 (朝日新書)



日本語は難しい言語？

- 漢字・ひらがな・カタカナのハイブリッドの表記体系
- 音読みと訓読みの存在、その不規則性
- 人称代名詞の種類が多い
- 主語が曖昧で、しばしば省略される
- 助詞の用法、語彙量、敬語、方言、オノマトペ、カタカナ語、……

カタカナ語の氾濫

- 海外では伝わらない・誤解される「英語」：
(コンセント、スキンシップ、クレーム、サラリーマン、
ノートパソコン、ハイテンション、オーバーシュート、……)
- 業界用語として好まれるカタカナ語：
(MTGにアサイン、クライアント、スキーム、アジェンダ、
アグリー、イシュー、ローンチ、アテンド、……)

「業界用語」の負の側面

- 自分たちはこれらの言葉を使いこなせる、これらの言葉で会話できるという、ある種の優越感や仲間意識を醸成する一方で、その**外側との壁をつくる**作用も及ぼす。
- とりあえず使っておけば、特に考えずにその場を楽にやり過ごせるという、便利な**常套句の濫用**。
自分でも意味の分かっていない言葉を投げ合うという、曖昧なコミュニケーションや空虚なやりとりに陥る可能性。
- 思考停止、物事の見方の固定化、思考の硬直化、外部の排除。

〈やさしい日本語〉の必要性 ①

- 庵功雄『やさしい日本語：多文化共生社会へ』岩波新書、2016年
- 〈やさしい日本語〉：特定の障害がある人や在日外国人等にとっても習得や理解がしやすいように、
 - (1) 語彙を絞る
 - (2) 文型を集約するなどして文法を制限する
 - (3) 難しい表現をかみ砕くといった仕方で調整された日本語

〈やさしい日本語〉の必要性 ②

- 災害時における広範な情報発信という用途。

「地震直後に必要になる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も事前に購入しておきたい」

→「地震のすぐあとのための水や食べ物はとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク（水を入れるもの）も買ってください」

(庵 2016: 187-188)

〈やさしい日本語〉の必要性 ③

- 多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語という用途。
- 日本語を母語としない人々が日本で安心して暮らすために最低限必要な日本語、というものを基準に、皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、特定の障害がある人や在日外国人などが「**日本の中に自らの『居場所』を作る**」(庵 2016: 73) ことにつながりうる。
- 自分とは異なる背景をもつ相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、コミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。
(庵 2016: 184ff)

〈やさしい日本語〉の規範化？

- ただし、〈やさしい日本語〉が日本語それ自体の規範にならないように注意する必要がある。
- 実践的・倫理的に重要な意義をもつものは、それゆえに規範化されやすい。
- 当用漢字表（1946 内閣告示）と、常用漢字表（1981 内閣告示）がこの社会において日本語の規範として働いている現実。

〈難しい日本語〉の必要性

- 専門家の表現がときに難しいものになるのは、本当は分かりやすく言えるのに、敢えて好きこのんで難しい言葉を用いているからだ、とは限らない。
- 複雑な問題を正確に捉え、解決の方途を正確に言い表そうとすれば、その表現はおのずと複雑で、繊細な意味合いを帯びることになる。突き詰めた思考と、そのための表現が必要なことも。
- かみ砕かれた「やさしい」言葉は、人によってはむしろわかりにくかったり、伝わりにくかったりすることが往々にしてある。

「駆ける」と「走る」はどちらかでよい？

- 「駆ける」 = 「馬に乗って走る」「飛ぶように速く走る」
「奔走する」
- 「走る」 = 「通って続く」「ある方向に強く傾く」
「スムーズに流れる」「瞬間的に現れる」
- 「駆けずりまわる」「駆けつける」「駆けめぐる」「駆け出し」「駆け落ち」……
- 「走り書き」「小走り」「使い走り」「突っ走る」「才気走る」「口走る」……

生ける文化遺産としての自然言語 ①

- 自然言語は、歴史的建造物などと全く同様に、人々の生活のなかで、現実の一部としてそこかしこにあり、しかも、いま現在も人々が使用している（それゆえ、たえず変容し続けている）文化遺産という側面がある。
- 言葉の多義性・多面性は、その言葉が息づく文化の**生活のかたち**（**生活形式**）を反映している。
- 「言葉は生活の流れの中ではじめて意味をもつ。」
（ウィトゲンシュタイン『ラスト・ライティングス』I-§ 913）

生ける文化遺産としての自然言語 ②

- 九鬼周造『〈いき〉の構造』講談社学術文庫、2003[1930]年。
- 「例えば、espritという意味はフランス国民の性情と歴史全体とを反映している。……英語のspritもintelligenceもwitもみなespritではない」（16）。
- 「いき」……chic、elegant、smart、hip、dressy、rakishはどれも、「いき」の一面しか捉えられない。
- 九鬼は「いき」を、「媚態」「意気地」「諦め」という面から**多面的に**捉えている。

生ける文化遺産としての自然言語 ③

- 「しあわせ」……元々は、二つの事物がぴったり合った状態を指す言葉。そして、その状態は自分の意志や努力だけでは実現せず、それを超えた働きに大きく左右されるものだという受けとめ方が、この言葉には込められてきた。
それゆえ、かつてこの言葉は「めぐり合わせ」や「運」「運命」「なりゆき」「機会」といったものを主に意味し、しかも、良いめぐり合わせにも悪い巡り合わせにも用いられてきた。つまり「幸運」以外にも、「不運」「不幸」「人が死ぬこと」「葬式」といった意味すらもっていた。
(『日本国語大辞典 第二版』より)

生ける文化遺産としての自然言語 ④

- 「かわいい」……「かわゆい」が変化した語で、元々は「顔映(は)ゆし」、つまり、顔が赤らむ、見るに忍びない、といった意味の言葉に由来する。

中世以前は、小さい者や弱い者を不憫に思う心境を表す言葉として用いられていた。それが中世後半に至ると、同じく小さい者や弱い者に対する情愛の念や愛らしいと思う気持ちを示すようになり、次第にこの種の意味合いが優勢になっていく。そして、近世の後半以降は「不憫」の意味が次第に消失し、専ら「愛らしい」という類いの意味で用いられるようになった。
(『日本国語大辞典 第二版』より)

生ける文化遺産としての自然言語 ⑤

- 語源のみに事柄の本質を見ようとして、言葉の意味の時間的な変化を無視する姿勢——言うなれば、「語源原理主義」——は間違っているが、かといって、いま現在表立っている用法のみに注目することも、一種の視野狭窄に陥っている。
- 積み重なった言葉の歴史を踏まえることは、普段滑らかにテンポよく言葉を使っているときには意識しない、言葉のもつ重要な奥行きを確かめることに繋がる。
- そしてその作業は、いま「しあわせ」とされることや「かわいい」とされるもの等々について、新しい視座やアイディアを与えうる。——「故きを温ねて新しきを知る」

カタカナ語が有用であるケース ①

- 「ヘイトスピーチ」……公の場で、特定の人種・民族・宗教・性別・職業・身分に属する個人や集団に対して憎悪や差別感情を露わにして発せられる悪口や中傷のこと
- 「カミングアウト」……主に性的マイノリティが、自らの性のあり方を他者に開示すること。
- 「アウトティング」……本人の主に性のあり方を、同意なく第三者に暴露すること

(参考：松岡宗嗣『あいつゲイだって——アウトティングはなぜ問題なのか?』柏書房、2021年)

カタカナ語が有用であるケース ②

- 馴染みの言葉がこれまで担ってきた意味合いに引きずられずに、馴染みの言葉では一語で表現できない重要な意味合いを担う、ということが可能。
- たとえば、「ケア」という言葉。「手当て」「介護」「世話」「保護」「気遣い」等々の言葉のどれにも完全に置き換えることはできない。
- ただし、カタカナ語は、理解や許容の程度に関して、人々の間に大きな分断を生む傾向も強い。(そして同様のことは、歴史的な文脈の負荷が強かった言葉についても言える。)

やさしさと豊かさの緊張関係を維持する

- 言葉のやさしさを追求する方向性と、言葉の豊かさを追求する方向性の間には、緊張関係が存在する。
- そして、この緊張関係は解くべきではない。
- **言葉の繊細さや正確さ**を重視すべきなのはどのようなときか、**翻訳のしやすさや機械的な処理のしやすさ**などを重視すべきなのはどのようなときかを、よく見極めるべき。間違っても、個別の言語実践の中身を度外視してどちらかの方向性に塗り潰すべきではない。